追悼　東晋次先輩

江村治樹

昨年二〇二一年十月、名古屋大学文学研究科史学地理学科博士課程（東洋史学）を出られ、三重大学教授を勤められた東晋次さん（私にとって東洋史学研究室の先輩であり、研究者仲間であったのでこのように呼ばせていただく）が逝去された。あまりに突然であったので茫然自失の思いであった。コロナ禍が終われば、年二度の慣例となっていた、東さんと近い東洋史研究室大学院出身者の名古屋での飲み会でお会いできると思っていたが、それも叶わぬこととなった。

まず、東さんの本誌『名古屋大学東洋史研究報告』との関わりについて述べておきたい。実は、東さんの存在がなければ、この雑誌の発刊はなかったと言ってよい。私は、一九七一年に神戸大学から名古屋大学修士課程に進学したが、この年、東洋史では修士課程に、中国古代中世史専攻者が四人も合格した。研究室には、中国古代中世史を専攻する最も上の先輩に東さんがおられ、我々進学生のリーダー格であった。谷川道雄先生の演習が終わると、毎週のように先生も誘って今池に飲みに行った。谷川先生も大学紛争の直後で院生に気を使って付き合われ、よく飲みよく議論した。谷川先生から受けた学問上の薫陶は多くこのような場であったように思う。私は進学当初は岐阜から通っていたが、最終電車に間に合わず、東さんの下宿に泊めてもらい、そのまま翌朝の演習に出席したこともあった。後、東さんが結婚された後は、その下宿を私が引き継いだ。東さんには個人的に本当に面倒をみていただき、感謝してもし切れない。すっかり、個人的な話になってしまったが、ある時、院生の間で研究室から雑誌を出したらどうかという話になった。確か東さんが谷川先生に相

名古屋大学東洋史研究報告　四十七号　二〇二三年三月発行

談に行ったところ、「君らに出来るかな」と皮肉られたとのこと。そこで発奮して発行を決意し、誌名を「不老史学」（名古屋大学の地名が不老町）などいろいろ考えたが、結局のところ谷川先生に相談して現在の誌名になったと記憶している。なお、付け加えれば、近年、東洋史研究室では院生の数が激減し、雑誌発行の継続が困難になってきた。これに危機感を持たれた東さんは、発刊に関わった者の責務と感じられ、退職を機会に数年前、雑誌編集の助力を買って出られた。東さんの突然の逝去は、雑誌の継続的刊行のためには大きな痛手と言わざるを得ないが、東さんの遺志をなんとしても受け継いでいかなければならないと思う。

次に、後輩として僭越ではあるが、東さんの研究上の功績について述べる。東さんは、中国古代中世史の分野で大きな足跡を残された。まず、一九九三年に名古屋大学に提出された学位請求論文をもとに、一九九五年に『後漢時代の政治と社会』（名古屋大学出版会）を刊行された。本書は後漢二百年の政治体制の変容を、中央政界の勢力関係だけでなく、その背後に存在する社会勢力、とくに地方豪族の動向にも注視しながら考察した研究である。私が院生であった頃は、後漢時代の研究は、その根本史料である『後漢書』が二百年後のずっと後代の編纂であることから、史料的に問題があるとして日本では極めて手薄であった。当時、漢代史研究は、秦漢帝国の成立期である前漢に重点が置かれ、魏晋南北朝史の研究において後漢末が注目される程度であった。本書が刊行される頃には、後漢研究はようやく制度史上注目されるようになり、政治史に重点を置いた狩野直禎『後漢政治史の研究』（同朋出版、一九九三）が刊行されたが、地方社会の変質まで視野に入れて、後漢時代の政治体制の変容を、総体的に通観した研究は本書が最初である。そして本書は、事実関係を中心に『後漢書』を注意深く使用し、綿密な実証に基づく明快な論述に貫かれている手堅い研究であることも強調しておきたい。近年、後漢時代においても、同時代史料である簡牘類の発見が相次ぎ、この時代の研究が活発化しており、本書の先見性は特筆されるべきものがある。

『王莽－儒学の理想に憑かれた男』（白帝社、二〇〇三）で取り上げられた王莽や王莽政権に関する研究も日本においては手薄であったが、東さんは果敢に取り組まれた。前漢王朝と後漢王朝の狭間に新王朝を打ち立てた王莽は簒奪者として歴代非難され続けてきた。またその政策も歴史研究者からアナクロニズムとして切り捨てられることが多かった。かつ王

莽政権を理解するには深い経学への理解が必要であり、歴史研究者から敬遠される傾向があった。本書は、王莽の人間性にまで踏み込んで内在的評価を試みた、日本における本格的な王莽伝である。王莽政権論ではないと断っているが、十分にその基礎を与えるものとなっている。なお、本書は中国でも評価され中国語訳が中国で出版されると聞いている。

東さんは生前、代表作『後漢時代の政治と社会』に続く第二の専著をいずれ出版したいと言っておられた。しかし、それがかなわぬまま逝去されてしまった。逝去された後、元院生仲間の山田伸吾氏から、東さんの奥様から託された遺稿があるので読んでほしいと頼まれた。一読して、東さんの歴史研究への思いが詰まったものであったので紹介しておきたい。

遺稿は、出版を考えて、『漢・三国の社会と人間』と題されており、三部に分かたれている。「あとがき」はあるが「序文」はない。成稿の日付は、二〇二一年の五月初となっている。書下ろしが一篇あるが、他はすべて旧稿で、一九七〇年代の論文二篇、一九九〇年代の論文七編、二〇〇〇年代以後の論文七篇から成っており、前著以後に書かれたものが中心である。旧稿は修正されていないようで、補注なども一切ない。第一部は「漢代社会史論」、第二部は「後漢代官僚・知識人論」、第三部は「任侠的人間関係論」と題されている。

通読して感じたことは、学生、院生時代に抱かれた問題意識が一貫して保持されていることである。私も東さんと共有した学生、院生時代の東洋史研究では、西嶋定生、増淵龍夫、宇都宮清吉などの秦漢帝国構造論を経て、谷川道雄、川勝義雄の中世共同体論が大きな潮流となって立ち現れ、学界に大きなインパクトを与えていた。東さんに限らず、同世代の院生、若手研究者はその影響を強く受けたが、東さんはその問題意識を晩年まで持ち続けられ、より高いレベルまで高めようと努力された。すなわち、単に構造の解明にとどまらず、人間存在の問題に強い関心を抱き、かつそれを歴史的に捉えようとされた。とくに、第二部以後は、戦国から三国時代を通しての任侠精神に対して強い関心が示されている。第三部の第七論文「『分』の語より見た三国時代の人的結合関係」は本誌に掲載された絶筆となった論考である。ここでは「歴史学における人間の心情や精神の解明」が課題とされているが、東さんの王莽研究の問題意識とも通じるところがある。私自身も、院生時代から任侠精神など人間関係の問題に強い関心を持ってきたが、東さん生存中に十分議論できなかったことが悔やまれる。

最後に大学運営上、教育上の功績に触れておく。東さんは名古屋大学大学院博士課程単位取得後、愛媛大学教育学部助教授を経て三重大学教育学部教授として長年にわたり教育に従事され、多くの学生を育てられた。三重大学では評議員、副学長の重責を担われ、国立大学独立法人化直後の大変な時期の大学運営に携わられた。二〇〇九年三重大学定年退職後、二〇一六年まで天津師範大学で日本語教育に従事され、多くの中国人学生を育てられるとともに日中交流にも尽くされた。この間の状況については、『退職老人の日本語教育－日中共同教育in天津』（白帝社、二〇一七）に詳しく記されている。

私にとって、学問上最も付き合いが長かった友人は東さんをおいて他にない。しかし、互いに激論を交わしたという記憶がない。東さんは、いつも先輩として私の勝手な発言をやさしく受け止めてくれていたような気がする。中国旅行は学会出席という形で二度ご一緒した。西安の秦漢史学会に出席した帰り、東さんと二人で甘泉宮や洛陽、上海を訪問し、王莽の遺跡も訪ねた。その折、西安で食べた揚州チャーハンの味が気に入り、訪問した各地で食べ歩いたことが妙に心に残っている。

（二〇二二年十一月記）

（えむら　はるき　名古屋大学名誉教授）